

都市河川の今後のあり方に関する研究 ～福岡市・樋井川について～

福岡大学工学部 学生会員○長野紋子 福岡大学工学部 正会員 渡辺亮一

福岡大学工学部 正会員 山崎惟義 南畑ダムを貯水する会 非会員 山下輝和

1. はじめに

1991年(平成3年)に建設省(現国土交通省)がスイスにおける近自然河川法を意識した「多自然型川づくり」を導入し、1級河川において良い川づくりを促進してきた。これ以降、97年(平成9年)の河川法改正をはさんで、治水と同様に河川環境も重要視した川づくりが進められてきている。そして、昨年、「多自然型」の型がとれ「多自然川づくり」へと変貌し、どの河川も多自然川づくりを行なうことが目標となっている。このように、国交省の管轄する1級河川においては、「多自然川づくり」が実施され、良い川づくりが浸透してきたが、都市域を流れる2級河川(この河川を都市河川と呼ぶ)では、「多自然川づくり」からは程遠い川づくりが続けられてきた。しかし、近年、まちづくりについても水辺環境のあり方の面から都市を見直す機運が高まっており、水辺の美しさや潤いなどに配慮するべきだという考えも高まっており、都市生活者(住民)は機能だけでなく、治水も親水も満足できる川を望んでいるのではないのでしょうか?そこで、福岡市を流れる樋井川の今後について考えていくことにした。そこで、樋井川の流域住民の意見を抽出し、その意見を元に住民の望む樋井川のあり方を研究することとした。

2. 樋井川概要

樋井川は、福岡市の城南区と南区にまたがる油山を源流とし、南区・城南区・中央区を流れ、早良区と中央区の境界を流れ、博多湾に注ぐ。全長が12.9km、流域面積が29.2k m²の2級河川で、県が管理を行なっている。支川としては七隈川・片江川・一本松川・駄ヶ原川・東油山川・檜原川・糠塚川・四十塚川の8本を有している。

昔、油山東麓に長い樋(とい)をかきつけて対岸の水を引き、灌漑(かんがい)していたことから樋井川と名付けられたように、昔から流域住民の生活の中にあつた河川であることがわかる。

3. 研究手法

3.1 アンケート調査

平成18年8月2日から配布を開始し、約3ヶ月に渡って樋井川流域の方や樋井川に関わりのある方を中心にアンケート調査を実施した。配布したアンケートはA4用紙8枚で構成されている。1ページ目に概要・趣旨説明を記載。2ページ目以降にアンケートの本文に入る。

内容は属性・過去についての質問・現在についての質問・未来についての質問・地図への情報記載の5項目からなっている。属性の項目については①身近に感じる河川②年齢③性別④居住年数⑤現住所から河川までの直線距離⑥河川へかける頻度の6項目。過去についての質問の項目については「河川の変化を感じるか」「昔の風景について」「水害経験の有無」についての3項目。現在についての質問の項目については河川に対して「自然豊かさ」「美しさ」「安らぎ」「危険性」を感じるか、「川原」「動植物」の多少、「日常生活での利用法」の6項目。未来についての質問の項目は「今後どういった河川にしていきたいか」の1項目。配布方法は柏陵高校では1人の生徒に4部を1セットとし封筒に入れたものを配布し、各家庭で回答・回収。その他にも9月末に福岡市役所前広場にて他記式でアンケート回収。また、流域の住民の方にも協力頂き、各家庭に配布後回収した。

3.2 聞き取り調査

樋井川流域への居住年数の長い流域住民の方を対象に、平成18年8月25日、9月1日、9月14日、11月15日の4度にわたって3名の方から聞き取り調査を実施した。調査対象者はいずれも対象河川(樋井川)流域に60年以上居住されている方で、昭和28年、昭和38年の水害の経験者である。

4. 結果・考察

アンケートの回収部数は全部で約490部。内、樋井川についての回答が行われたアンケートは240部となっており、年齢・性別ともに大きな偏りは見られず、統計データとして信用することができるものとなった。



写真1 樋井川聞き取り調査

今回のアンケート調査の結果から、未来についての項目を見ると、年齢・居住年数・水害の有無を問わずに「樋井川が今後どのようにあってほしいか?」という項目については「自然豊かな川」という意見が多く見られた。この他にも「懐かしいイメージを持った川」や「昔（コンクリートに覆われる前）の川」自然豊かな状態を望む声が多い。改修前の樋井川は生活の一部として存在していたが、河川改修と共に川と生活空間の距離は広がった。この距離を縮めることで住民の望む河川に近づくことができる。

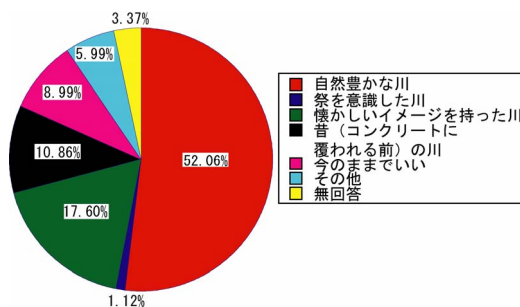


図1 樋井川アンケート結果（未来についての項目）

過去についての質問の項目では「樋井川について変化がみられるかどうか?」という質問に対して「変化が有る」と答えた人が52.5%、「変化がみられない」と答えた人が39.6%と流域住民の大半が「変化がある」と感じていることがわかった。その中で、どのような点に変化を感じるかをまとめると図2、図3に示すような結果が出た。

変化点で好転した点、悪化した点のいずれにおいても動植物が大きな割合を占めている。また、好転した点については景観的な意見として、漠然と「綺麗になった」という意見が多く見られた。この意見には「水質が良くなった。」「ゴミが減った。」などという意見が反映されたものであると考えられる。

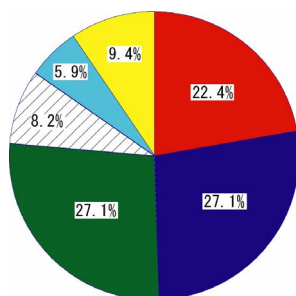


図2 好転したという意見（51.8%）

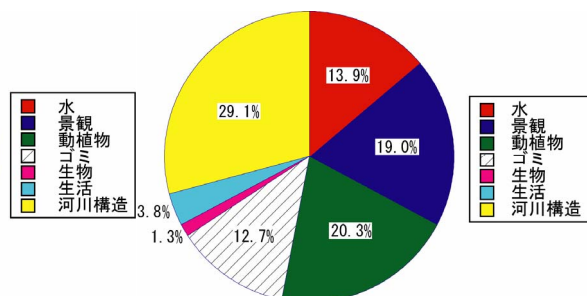


図3 悪化したという意見（48.2%）

また、悪化した点については河川構造についての意見として「河川に近づく難くなった。」「川に入り難くなった。」などの意見が多く見られた。この中でも年齢が高くなるほど変化が有ると感じている意見が多くなっており、なおかつ居住年数が30～40年以上になると、変化を感じる割合が急激に増加している。これらは昭和30年代後半に樋井川で行なわれた河川改修事業が大きな影響を及ぼしているものと考えられる。この他にも「樋井川で泳ぐにあたって危険とを感じるか?」や「今後どのような河川であって欲しいか?」などの項目について同様に居住年数が増えるにつれ意見の偏りが大きくなり、特に居住年数が30～40年以上になると急激に増加している。このことから、昭和30年代後半に行なわれた河川改修事業が住民に与えた影響は大きいと考えられる。そこで、河川改修事業を行なう前の樋井川の状況を知る住民に聞き取り調査を行なった。その結果、河川改修が行なわれる前、樋井川は住民の生活の一部として位置付けられており、子供が川で成長し、大人が川で炊事・洗濯を行なっていた。つまり、河川と人々の生活の距離が近かったと考えることができる。

5. まとめ

今回のアンケート調査から、住民と意見として、「自然豊かな川」・「懐かしいイメージを持った川」・「昔（コンクリートに覆われる前）の川」の割合が高いことがわかった。これらのどの意見についても自然を求める意見と位置づけることができる。そこで、河川を改修前の状態に近づけることが最善であると考えられるが、現状から改修前の状態に近づけることは不可能に近い。そこで、樋井川流域の空き地や田畑等（写真2）を利用することによって、部分的に親水性の構造をすることは住民の合意も得られやすいと考えられる。このようなやり方で自然度を増せば結果として川幅が広がり、親水性に限らず治水面においても利点を見出すことができ、現在の都市河川におけるの好ましい手法ではないかと考えられる。



写真2 樋井川流域の田んぼ

参考文献

- 1) 土屋十郎著・信山社サイテック『都市河川の総合親水計画』
- 2) 皆川朋子『河川中流域における自然環境の変化と保全・復元に関する基礎的研究』
- 3) 副田翠峰著・里文庫『樋井川の四季 ～若草もゆるころ～』
- 4) 副田翠峰著・里文庫『樋井川の四季 ～わんぱくのころ～』
- 5) 編者代表鳥越浩之・新井土「里川の可能性 利水・治水・守水を共有する」
- 6) 樋口明彦・川村らのまちづくり研究会「川づくりをまちづくりに」